研究発表　第二日

保育計画における盲点

——幼児各個の発達過程をいかに見るか——

西南学院短期大学
高橋さやか

現行の保育計画は多種多様であるとはいえ結局文部省の幼稚園教育要領にいう六領域を中心に単元または主題をあげ、目標、期待効果を示し、行事、経験を設定するという形に帰納できよう。その主眼点のあり方は大体次の四つに類別できよう。

(1)季節と行事を追うもの
(2)生活訓練（主として社会性の訓練）に重点をおくもの
(3)主として六領域における能力向上を期するもの
(4)単元中心に相関教科タイプの経験主義を重んじるもの

いずれにしても保育計画が教育内容及び教諭保母側に重心がおかれることはやむを得ないし一般的標準的な条件（環境設定についても対象に対する考察にしても）をとりあげるにとどまることも争えない。一応一人前の人間——成人になる前提として一人前の子どもすなわち標準に達した子どもをめざしてその成長を助けようと保育するのであるから必ずしも如上の保育計画が不備不当のものとはいえないが、しかし、幼児期に個体の確立が不十分であったなら（思春期になおチャンスがあると考えられるにもせよ）人間の育成について大きな不備となることは言をまたないであろう。したがって個人差の甚しい幼児期の幼児各個の発達過程をいかにみるかという問題を保育計画における盲点として確認することは重要であると考える。

一つには、保育計画を少なくとも心がまえの上では個人別にもつこと、週・日案における幼児各個の活動を（立案時に）明らかに見ること、いわゆる自由遊び、日常会話、グループ活動を一層重視すること。

第二には、保育計画にあまりに重心をおいた保育生活から、環境構成、備品管理、家庭訪問、日誌、各種調査記録の整理などになお十分の力点をおく生活を、意識して実践することに、盲点解決への反省があり、方途が見出されると思う。